別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　　澤入要仁

澤入要仁氏の「カリヨンのひびき――ロングフェローの詩とアメリカの文化」は、19 世紀アメリカの詩人、ヘンリー・ワズワース・ロングフェローのアメリカにおける評価激変の過程をたどりつつ、ロングフェロー詩とアメリカ文化との関係を再考しようとするものである。ロングフェローの詩作品は同時代の国民に広く愛され、知識人の深い崇敬を勝ち得た。その詩作品は飛ぶように売れただけでなく、挿絵として描かれ、歌曲として歌われるなど、ジャンルの枠を超えて広く伝播していった。だが、ロングフェローの地位は、死後、一気に凋落し、過去の遺物の象徴として厳しい批判を受けるに到る。本論文は、ロングフェロー作品の精読を経て、ロングフェロー詩と 19 世紀アメリカにおける様々な文化領域との交渉の諸相を考察し、さらに、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて起きたロングフェロー文学排除の動向の文化的背景を探ることで、ロングフェロー詩が、どの同時代文学者の作品よりも深く、19 世紀という時代そのものと結びつくものであることを示して、その再評価を目指さんとするものである。

本論文は、本論三部と序章および終章から成る。以下、本論文の構成に従って、その概略を述べる。まず、序章「ロングフェローとアメリカ」に続いて、ロングフェローの作品分析をおこなった第一部「カリヨンの音色――ロングフェローとその作品」は、第一章「一九世紀前半のアメリカと詩人たち」、第二章「「村の鍛冶屋」とアメリカの神話」、第三章「「イクセルシオ」と詩人の理想」、第四章「「雪ひら」と新しい詩学」、第五章「『ヒアワサの歌』とアメリカ史の創造」の計 5 章から成り、エクスプリカシオン・ド・テクスト（explication de texte）の手法に依拠しつつ、「村の鍛冶屋」（1839）、「イクセルシオ」（1841）、『ヒアワサの歌』（1855）、「雪ひら」（1859）の 4 作品が考察される。「村の鍛冶屋」と「イクセルシオ」はともに 19 世紀に愛唱された作品だが、20 世紀に入ると、前者はその教訓臭・道徳性ゆえに斥けられるに到り、理想に燃える若者を歌った後者は、むしろ滑稽な物語として受けとめられるようになった。『ヒアワサの歌』においてロングフェローは、「インディアン」の歴史と白人の歴史とを融合し、アメリカの過去を有史以前に延長させることによって、アメリカの起源、アメリカ人の起源の再創造を試みた。だが、企図の大胆さゆえか、それは後に荒唐無稽な発想として斥けられてしまうのである。小品「雪ひら」を取りあげた章では、平明で大衆的な詩風によって特徴付けられるロングフェローが、韻律の技法に意識的な、技巧的、実験的な詩人でもあったことが指摘される。

ロングフェローの詩作品の、文化領域を横断する、クロスジャンル的影響の諸相を検証する第二部「カリヨンの共鳴――ロングフェローとアメリカの文化」は、第六章「ハッチンソン・ファミリーと詩歌の共振」、第七章「『エヴァンジェリン』と挿絵の美学」、第八章「フィービー・ケアリーとパロディストの異論」、第九章「トーマス・モラーンと『ヒアワサの歌』の風景」、第十章「朗読の文化史と「一日のおわり」」の計 5 章から成り、ロングフェローと同時代文化との交流の多様な相が、一次資料を綿密に駆使して詳細にたどられる。そこから浮かび上がってくるのは、広範に読まれ、大衆の想像力の内に根を張った詩人、ジャンルの壁を越えた多様な波動の震源として機能した詩人ロングフェローの形姿である。音楽への影響例としては、19 世紀のファミリー・コーラス・グループ、ハッ

チンソン・ファミリーが、美術への影響例としては、『エヴァンジェリン』の挿絵の系譜が、あるいは、風景画家トーマス・モラーンの、未完におわった版画集の下絵が分析対象とされ、ロングフェロー詩の語るアメリカの起源の物語が、風景画家の想像力を刺戟して、アメリカの風景の起源を描かせたこと、ロングフェロー詩に横溢する、現実を越えようとする情熱が、社会改革運動を推進していた歌手によって、理想主義を説く歌曲に変容していく様が活写される。

第三部「カリヨンの余韻――ロングフェローと二十世紀」は、第十一章「カルチャーとアメリカ文学研究事始」、第十二章「エインズワース・ランド・スポフォードと議会図書館」、第十三章「バレット・ウェンデルとニュー・イングランドの伝統」、第十四章「ヴァン・ワイク・ブルックスと過去への反逆」、第十五章「ジョージ・サンタヤナとお上品な伝統」の 5 章から成り、19 世紀末から世紀転換期にかけての、ロングフェロー批評、ロングフェロー受容の流れが解析される。ロングフェロー評価がネガティブなものに転じていく背景には、イギリスの詩人・批評家マシュー・アーノルドが提唱した、「カルチャー」を至高視する思想や、移民の増加という現実が掻き立てた、アングロサクソン系アメリカ人の危機意識などがあった。「カルチャー」を有しない人々や非アングロサクソンの人々にもなお愛読された詩人ロングフェローは、まさにそれゆえに否定すべき対象となったのである。こうした基本認識に基づいて、第三部では、世紀転換期のアメリカ文学教育、1897 年に竣工したアメリカ議会図書館、バレット・ウェンデルの著した『アメリカ文学史』(1900) が分析対象とされ、ロングフェロー否定の構図が成立していく過程が、逐一、検証されていく。ブルックスは評論『アメリカ成人に達す』（1915）によって、ロングフェロー排除の流れを決定づけた。哲学者・詩人のジョージ・サンタヤナは、「お上品な伝統」という批評概念を創り出すことで、ロングフェローに代表される 19 世紀中葉アメリカ文化に否定的なイメージの烙印を押す役割を果たした。

終章「ロングフェローと二十一世紀――詩の生命」は、大衆の心を捉え、広範な読者たちを結び合わせる効力を発揮し、同時代文化にあまねく行き渡ったロングフェローの詩が、否定すべき対象と化していったのは、それが 19 世紀という時代と表裏一体の、詩でありながら同時に詩以上の存在であったからだ、と結論づける。

本論文は、研究対象としては、本国アメリカにおいてさえ長らく冷遇されてきたロングフェロー文学を、19 世紀アメリカ文化の文脈の内にあらためて位置づけ、芸術と大衆文化とを架橋するものとして、その再評価を試みている。さらに、20 世紀への転換点にロングフェロー評価が一変した理由を、思想史、文化史、批評史的観点から詳細に明らかにした。テクスト分析、受容史、文化研究、クロスジャンル研究を組み合わせ、一次資料に徹底して当たることによって、「国民的詩人」ロングフェローの実相を余すところなく明らかにした功績は大であると言わねばならない。本論文に対しては、三部相互の関連性が弱い、比較・対比の対象が同時代を越えて恣意的に広がりすぎる、主観的・印象的評語がみられる等、構成面、方法面、記述面の問題点があげられた。ロングフェロー詩が様々に分析できることが、ただちにその再価値を保証することにはならない、本論文の出発点たる、ロングフェローの評価が不当に低いという立脚点そのものを問い直すことができるのではないか、などの指摘もあった。ただし、以上は、本論文が達成した優れた学問的成果を本質的に損なうものではないことも同時に確認された。

よって本審査委員会は、澤入要仁氏の論文が、博士（学術）の学位を授与するに相応しいものであると認定することに、全員一致で合意した。